

不登校に関する子どもと保護者向けの実態調査

実態調査概要：子ども調査

調査課題

- 2018年に日本財団が実施した「不登校傾向にある子どもの実態調査」で発表された不登校・および不登校傾向のボリュームが、現在どのように変化しているのか
- 不登校の子どもはどんな状況にいるのか（家庭・生活・学校的环境はどうなっているか）

調査手法

インターネット調査（プレスクリーニング5問／スクリーニング調査12問／本調査5問）

対象者条件

プレスクリーニング／5問

- 男女
- 全国
- 中学生程度（12歳～15歳）の子どもあり
- 次調査（スクリーニング）で「子ども本人が答える*」と回答

*今回対象とした「中学生本人」はネットアンケートモニター登録ができないため、ネットアンケートモニター登録をしている親のうち、中学生程度の子どもがいる方に、後日配信する調査の回答者を子ども本人に代わるよう依頼。中学生本人が回答するパーミッションを取得して次調査に誘導。

スクリーニング／12問

- 男女
- 全国
- ①中学生程度（12歳～15歳）…6,000サンプル回収
- ②中学卒業後（15歳～22歳）…14,000サンプル回収

*本レポートでは①のデータを中心に整理
 *6,000サンプルのうち、フリーアンサーを確認して小学生の12歳、高校生15歳を除いた5,953サンプルを用いて集計
 *2023年（速報）学校基本調査の結果を用いて、性別・学年の構成比が実態に合うようウェイトバック処理を行った

本調査／4問

- 男女
- 全国
- 不登校・および不登校傾向と考えられる（右記表）
- ①中学生程度（12歳～15歳）…150サンプル回収
- ②中学卒業後（15歳～22歳）…150サンプル回収

① 既に学校に行っていない子（不登校）	-1年間に合計30日以上、学校を休んだことがある/休んでいる -1週間以上連続で、学校を休んだことがある/休んでいる かつ -1年間に合計30日以上、学校を休んだことがある/休んでいる を非選択
② 学校、もしくは学校の近くまではいっているが、教室には行っていない子（假面不登校）	-校門や学校の玄関まで行ったが、教室に入らなかったことがある -授業中に、保健室や校長室など、教室以外の場所へ通じた・勉強したが月2～3回以上、休日は1週間つづけてあった
③ 教室には行っているが、授業に出る時間が少ない子（潜在不登校-隔）	-1ヶ月に遅刻・早退が5日以上あったことがある -授業を受けず、に給食だけを食べるために登校したことがある
④ 教室には行っているが、席とは違うことをしている子（潜在不登校-隔）	-教室にいたが、みんなとは別の勉強など、他のことをしていた が月2～3回以上、休日は1週間つづけてあった
⑤ 教室に行けており席と同じこともできているが、心では行きたくないと思う子 ※行動表出し（不登校予備軍）	-学校に行きたくないと思ったことが毎日あった

調査時期

2023年10月31日（火）～2023年11月3日（金）

実態調査概要：親調査

調査課題

- 不登校の子どもはどんな状況にいるのか（家庭・生活・学校の環境はどうなっているか）
- 学習系の補助・居場所支援の実態はどうなっているか（認知されているか・どの程度利用されているのか）
- 家族への支援の実態はどうなっているか（サポートは受けられているか、どんなサポートが望まれているか）

調査手法

インターネット調査（スクリーニング9問・本調査15問）

対象者条件

【スクリーニング調査：対象者条件】

下記の条件に合致するn=20,000を回収

- 日本全国の30歳以上の男女
- 現在子どもが1人以上いる

【本調査：対象者条件】

下記の条件に合致するn=412を回収。

- 日本全国の30歳以上の男女
- 現在不登校の中学生の子どもが1人以上いる

※本調査サンプルは中学生の親のみを含むが、スクリーニングサンプルには中学生以外の子どもの親のサンプルを含む点に注意

【割付】

特に割り付けは行わず、性別・年代等での人口構成比への補正も行わない。

※ここでの不登校の定義：下記いずれかに該当

- 1週間以上連続で、学校を休んだことがある/休んでいる
- 1年間に合計30日以上、学校を休んだことがある/休んでいる

調査時期

2023年10月31日（火）～2023年11月2日（木）

子どもたちの学校生活実態

不登校／不登校傾向の子どもたち(中学生)のボリュームを調査

30日以上
欠席

1週間以上
連続欠席

学校内で
行動表出

学校内で
行動非表出

学校生活をめぐる子どもの特徴(タイプ)		2018年		2023年	
		推計人数	割合	推計人数	割合
不登校A	①-1_1年間に合計30日以上、学校を休んだことがある / 休んでいる	99,850	3.1%	147,951	4.7%
不登校B	①-2_1週間以上連続で、学校を休んだことがある / 休んでいる	59,921	1.8%	124,828	3.9%
教室外登校	②学校の校門・保健室・校長室等には行くが、教室には行かない	130,703	4.0%	155,584	4.9%
部分登校	③基本的には教室で過ごす、授業に参加する時間が少ない				
授業不参加型	④基本的には教室で過ごす、皆とは違うことをしがちであり、授業に参加する時間が少ない (「教室にはいたが、みんなとは別の勉強など、他のことをしていた」月 2~3回以上、もしくは1週間つづけて)				
形だけ登校	⑤基本的には教室で過ごし、皆と同じことをしているが、心の中では学校に通いたくない・学校が辛い・嫌だと感じている (※行動表出なし/「学校に行きたくないと思ったこと」毎日)	142,161	4.4%	138,685	4.4%
オンライン登校	⑥オンライン登校(自宅からオンラインで授業に参加)			52,663	1.7%
登校	①~⑥非該当	2,819,049	86.7%	2,557,836	80.5%

不登校傾向

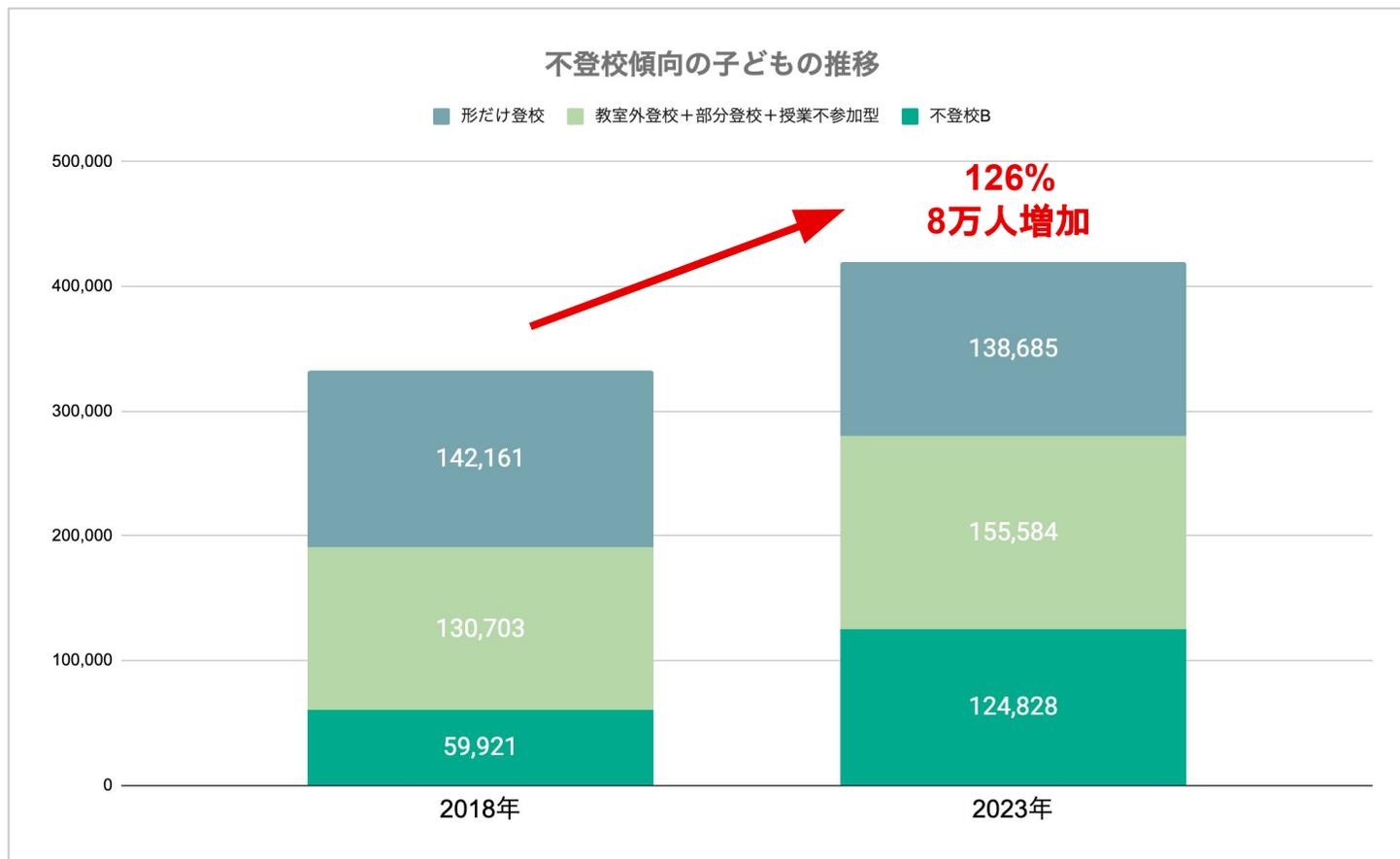
※構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計しても必ずしも100とはならない。

※推計人数は全国の中学生生徒数と今回調査の発現率より試算

※2018年は日本財団による「不登校傾向にある子どもの実態調査」の結果

不登校傾向41万人。5年で26%（8万人）増加

中学生の約5人に1人が「不登校」または「不登校傾向」^(※1)



選択肢	2018年 推計人数	2023年 推計人数
①-2 不登校B	59,921	124,828
② 教室外登校	130,703	155,584
③ 部分登校		
④ 授業不参加型		
⑤ 形だけ登校	142,161	138,685
合計	332,785	419,097

※2018年は日本財団による「[不登校傾向にある子どもの実態調査](#)」の結果

※1 P23の不登校A・不登校B・教室外登校・部分登校・授業不参加型・形だけ登校・オンライン登校の合計

不登校の子どもと同程度存在する 「形だけ登校」の子どもたち

選択肢	推計人数	%
不登校A	147,951	4.7%
不登校B	124,828	3.9%
教室外登校	155,584	4.9%
部分登校		
授業不参加型		
形だけ登校	138,685	4.4%
オンライン登校	52,663	1.7%
登校	2,557,836	80.5%
全体	3,177,547	100.0%

「形だけ登校」とは

・基本的には教室で過ごし、皆と同じことをしているが、「毎日心の中では学校に通いたくない・学校が辛い・嫌だと感じている」子どもたち。

※構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計しても必ずしも00とはならない。

通常登校より「形だけ登校」の子の方が、学校に行くことにプレッシャーを感じている

あなたにとって、『学校』とはどのようなところですか？

▶行かなければいけないところ

選択肢	通常登校	形だけ登校
あてはまる	33.7%	47.5%
どちらかといえばあてはまる	42.6%	29.4%
どちらともいえない	16.9%	18.5%
どちらかといえばあてはまらない	4.5%	2.7%
あてはまらない	2.3%	1.9%

0.5ポイントの差

▶緊張するところ

選択肢	通常登校	形だけ登校
あてはまる	4.0%	19.2%
どちらかといえばあてはまる	21.3%	21.0%
どちらともいえない	37.7%	33.9%
どちらかといえばあてはまらない	23.3%	12.3%
あてはまらない	13.7%	13.6%

15.0ポイントの差

▶行きたいところ

選択肢	通常登校	形だけ登校
あてはまる	15.1%	3.5%
どちらかといえばあてはまる	31.2%	9.7%
どちらともいえない	37.4%	21.9%
どちらかといえばあてはまらない	11.8%	19.6%
あてはまらない	4.5%	45.2%

33.1ポイントの差

▶安心できる場所

選択肢	通常登校	形だけ登校
あてはまる	9.1%	5.4%
どちらかといえばあてはまる	25.6%	7.7%
どちらともいえない	47.2%	28.5%
どちらかといえばあてはまらない	13.5%	19.7%
あてはまらない	4.7%	38.6%

21.4ポイントの差

※吹き出し内の数字は、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」の合計値の群間差。四捨五入により、グラフ内数値の合計と小数点第一位にズレ。

通常登校より「形だけ登校」の子の方が幸福度が低い

「幸せである」と回答した子どもは約4割にとどまり、通常登校の子どもとの差は33.8ポイント

33.8ポイント
の差

■現在のあなたの幸せ度合いについてお答えください。

選択肢	通常登校	形だけ登校
幸せである	73.4%	39.6%
どちらともいえない	23.8%	43.1%
幸せではない	2.8%	17.3%
合計	100.0%	100.0%

n=通常登校 4792、形だけ登校 260



学校に通っている子どもが抱えている悩み

いじめの被害者や不登校など当事者でなくても、複雑な気持ちを抱えて登校している子どももいる

チャット相談ブリッジ事例②<小学生>

学校に行きたくないと感じるんですね。いつ頃からそう感じるようになりましたか？

学校に行きたくない

もともと学校で勉強するのが好きじゃないし、なんか暇だから

学校での勉強がもともと好きではないのですね。なんか暇だと感じるのは1人で過ごしているときですか？

仲間に入れてもらえない

仲間に入れてもらえないと悲しい気持ちになるかと私は思います。そんな気持ちを抱えて学校で過ごすのはとても大変なのではないかと想像します。

学校に行っても、悪口、ケンカ、いじめられている人たちをみただけ。学校行ってもなにも得がない

チャット相談ブリッジ事例①<中学生>

そのように感じるのですね。いじめられているのは、あなたの知っている人でしょうか？

最近いじめが多い

私の友達です

あなたのお友達なんですね。それはとてもつらい気持ちになると思います。その子の気持ちを考えると友達のあなたがいてくれることが心強いらうなと思います。

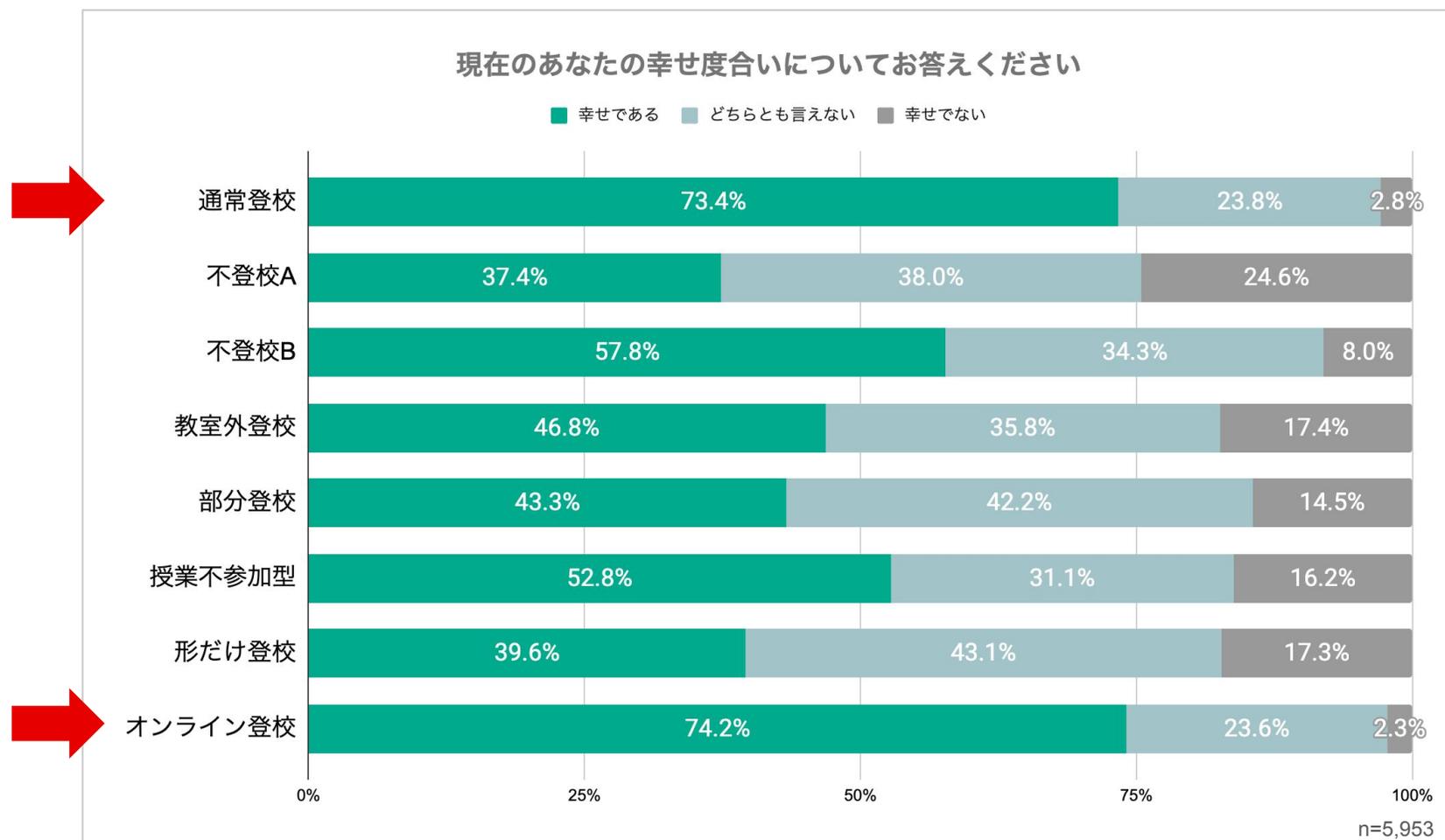
AさんとBさんからいじめられているのをみると私もつらくなります。AさんとBさんはクラスのリーダー的な人です。

そうですね。その場にいるのもつらい気持ちになると思います。あなたからAさんとBさんにやめるように注意をすることはやはり難しい状況でしょうか？

はい。私が言ったら、周りに言いつけて私もいじめられます。

オンライン登校している子の幸せ度は通常登校と同程度

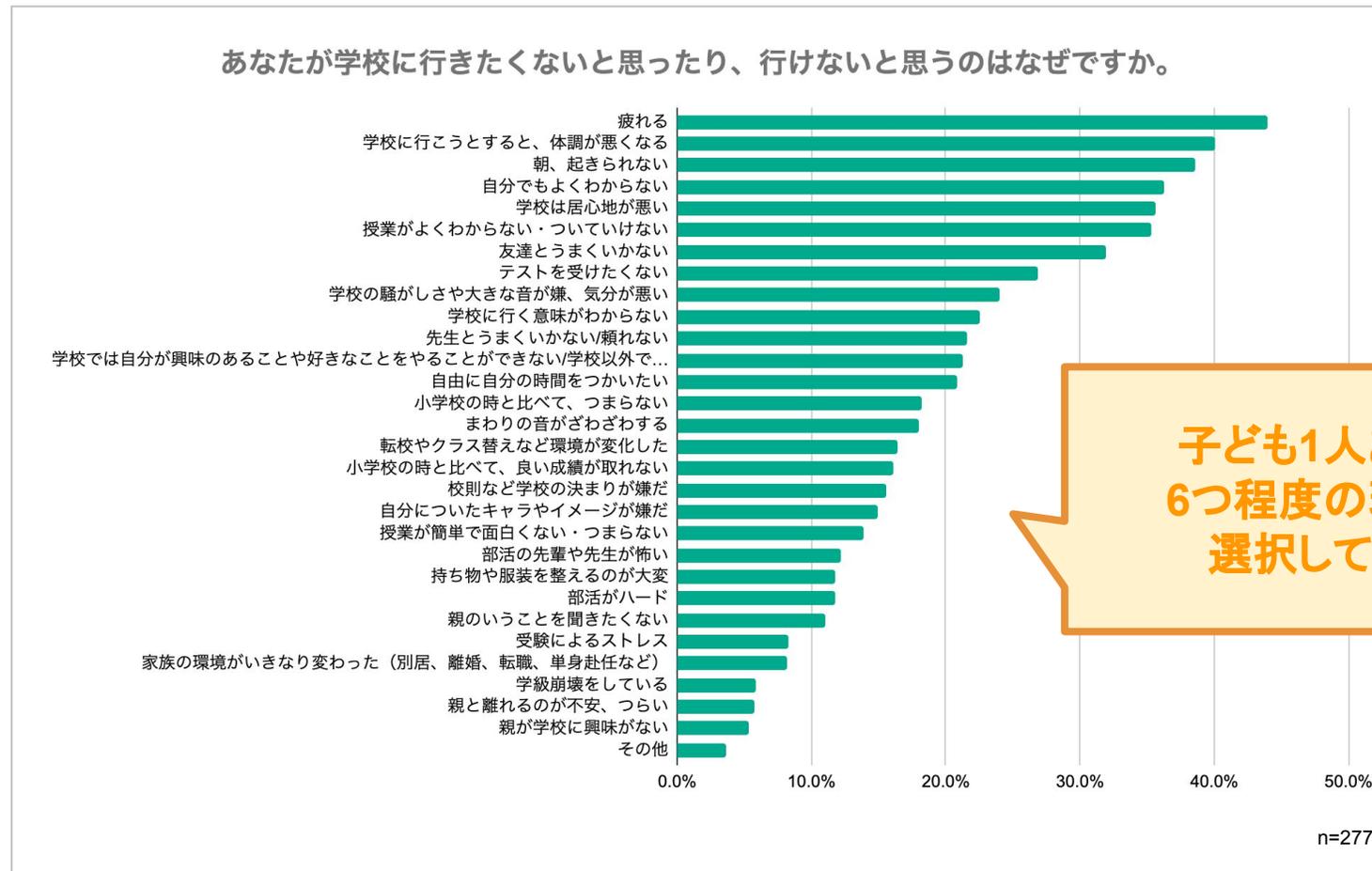
オンラインで授業を受けることにより、子どもにどのような気持ちの変化があるのかは未解明



不登校の子どもの状況

学校に行きたくない／行けない要因

子ども1人あたり6つ程度の理由を選択しており要因はひとつではなく、子どもたちが抱える課題は複合的



不登校の要因(文部科学省調査)

	不登校児童生徒数	学校起因 20.3% (単一回答)								家庭起因 11.6% (単一回答)			本人起因 63.2% (単一回答)		
		いじめ	いじめを除く友人関係をめぐる問題	教職員との関係をめぐる問題	学業の不振	進路に係る不安	クラブ活動、部活動等への不適応	学校のきまり等をめぐる問題	入学、転編入学、進級時の不適応	家庭の生活環境の急激な変化	親子の関わり方	家庭内の不和	生活リズムの乱れ、あそび、非行	無気力、不安	左記に該当なし
小学校	105,112	318	6,912	1,901	3,376	277	30	786	1,914	3,379	12,746	1,599	13,209	53,472	5,193
		0.3%	6.6%	1.8%	3.2%	0.3%	0.0%	0.7%	1.8%	3.2%	12.1%	1.5%	12.6%	50.9%	4.9%
中学校	193,936	356	20,598	1,706	11,169	1,837	839	1,315	7,389	4,343	9,441	3,232	20,790	101,300	9,621
		0.2%	10.6%	0.9%	5.8%	0.9%	0.4%	0.7%	3.8%	2.2%	4.9%	1.7%	10.7%	52.2%	5.0%
合計	299,048	674	27,510	3,607	14,545	2,114	869	2,101	9,303	7,722	22,187	4,831	33,999	154,772	14,814
		0.2%	9.2%	1.2%	4.9%	0.7%	0.3%	0.7%	3.1%	2.6%	7.4%	1.6%	11.4%	51.8%	5.0%

※ 「長期欠席者の状況」で「不登校」と回答した児童生徒全員につき、主たる要因一つを選択。

※ 下段は、不登校児童生徒数に対する割合。

出所: 令和5年度「令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」

不登校の子は「体調に異変をきたす」項目を多く選択

中には「音が気になる」など特性による内容も

No.	選択肢	通常登校	不登校	差
1	学校に行こうとすると、体調が悪くなる	1.2%	40.0%	38.8
2	学校は居心地が悪い	2.7%	35.6%	32.9
3	授業がよくわからない・ついていけない	8.1%	35.4%	27.3
4	朝、起きられない	14.5%	38.6%	24.1
5	自分でもよくわからない	12.7%	36.2%	23.5
6	学校の騒がしさや大きな音が嫌、気分が悪い	1.8%	24.0%	22.2
7	友達とうまくいかない	9.7%	31.9%	22.2
8	疲れる	21.9%	43.9%	22.0
9	学校に行く意味がわからない	3.3%	22.5%	19.2
10	先生とうまくいかない/頼れない	3.8%	21.6%	17.8

特性のある子どもたちへの合理的配慮を

さまざまな子どもたちが存在する中、**学校運営における工夫**が求められている

■ 発達障害の可能性がある子ども

一学級



▶ 通常の学級に在籍する小中学生の**8.8%**に学習や行動に困難のある発達障害の可能性がある」というデータが出ており、例えば**35人学級で3人程度**は存在することに

カタリバのオンライン不登校支援利用者の55%は、「心身又は発達上障がいがあると医師の診断を受けている」または「医師による診断はなされていないが、学習面や運動面、行動面において何かしらの困難がある」という子どもたち。

▶ 特性のある子どもたちの特徴

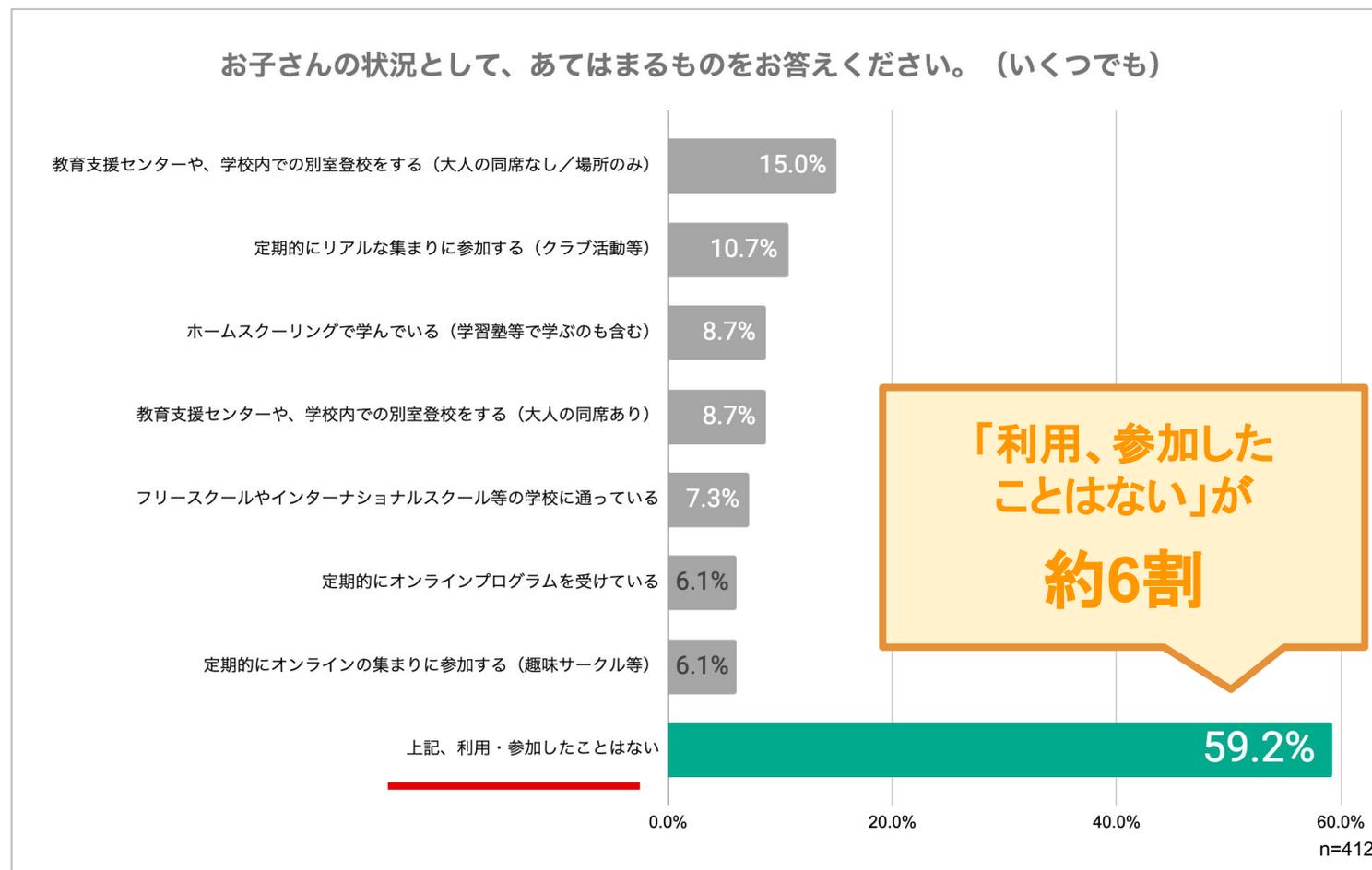
- ・家から出ることができない
- ・対人への苦手意識が強い
- ・癇癪が酷かったり感情コントロールが難しい
- ・光や音に過敏
- ・集団行動を行うことが難しい

発達障害の可能性がある児童生徒

小学生	10.4%
中学生	5.6%
高校生	2.2%

「自分の子は学校以外の学びの場を利用していない」約6割

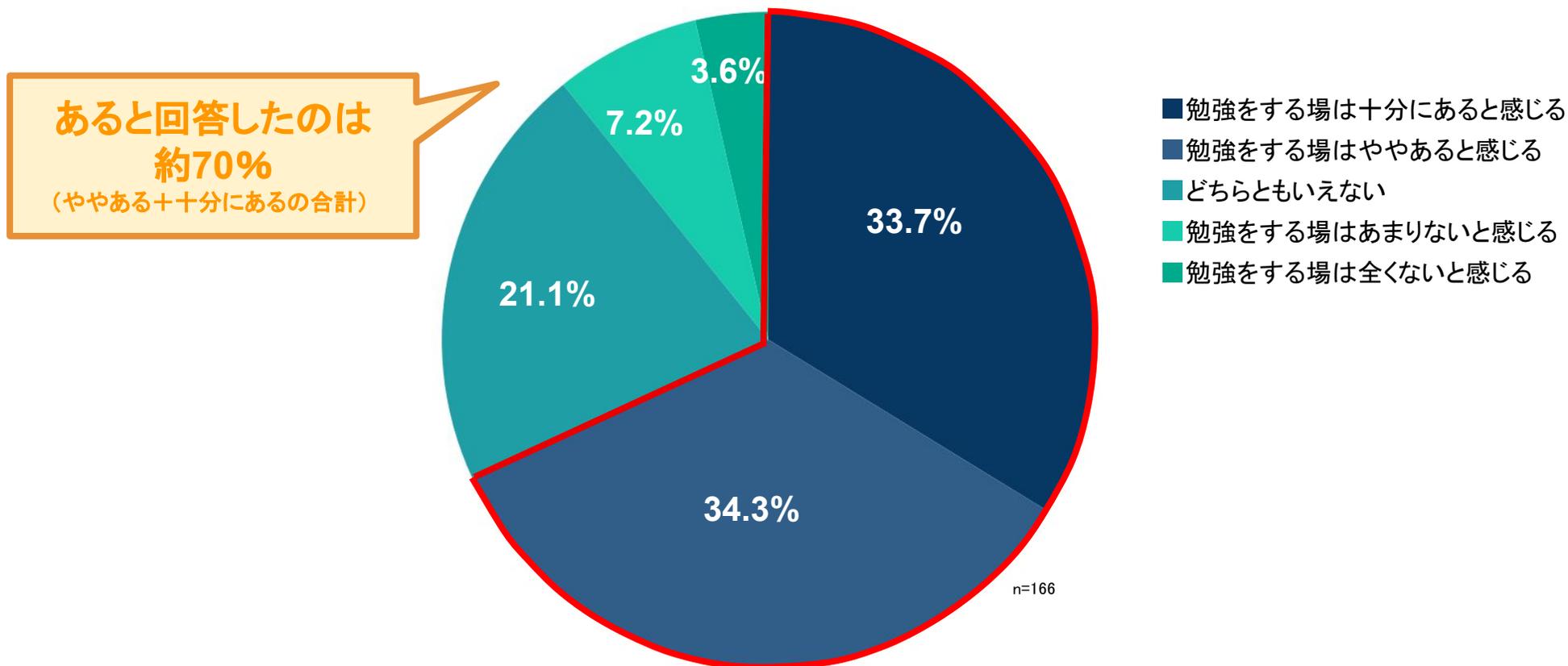
不登校の子を持つ親の6割が、子どもの状況として「学びの場を利用、参加したことはない」と回答



一方で、不登校の子どもの約7割は「学びの場はある」

前項の保護者の回答とは異なる傾向が出ており、学びの認識に違いがある可能性

Q: 学校以外に勉強をする機会は、あなたの身の回りにはあると感じていますか



不登校支援、認知率と利用率に差

公的支援について、知ってはいても利用されていない。そこには何かしらのハードルが

■お子さんが利用している施設と頻度をお答えください。→知っている／月1回以上利用している

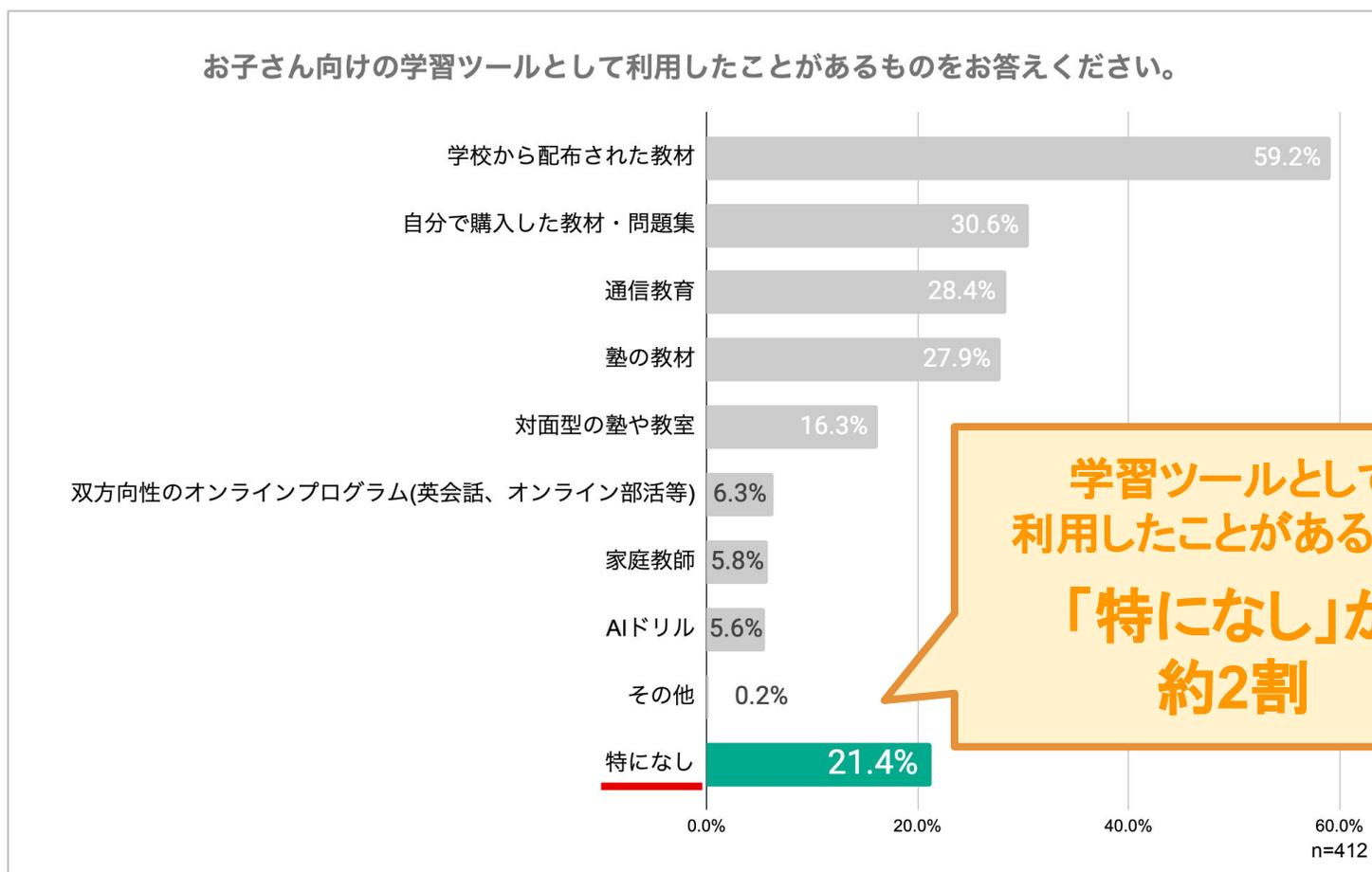
No.	選択肢	認知率	利用率
1	学校が設置する学校内の公営施設(校内フリースクールや別室登校)	70.4%	15.8%
2	病院・心理カウンセリング	85.9%	21.8%
3	スクールカウンセラー	85.7%	14.1%
4	クラブ活動(例:スポーツ少年団や運動系の活動、将棋等の文化系の活動)	86.2%	30.8%
5	教育委員会が設置する学校外の公営施設(教育支援センター等)	63.1%	10.0%
6	学校内の特別な支援を行う活動や施設(通級指導教室等)	70.1%	17.2%
7	保健室	91.0%	20.1%

※選択肢の中から公的支援のみを抜粋

n=412

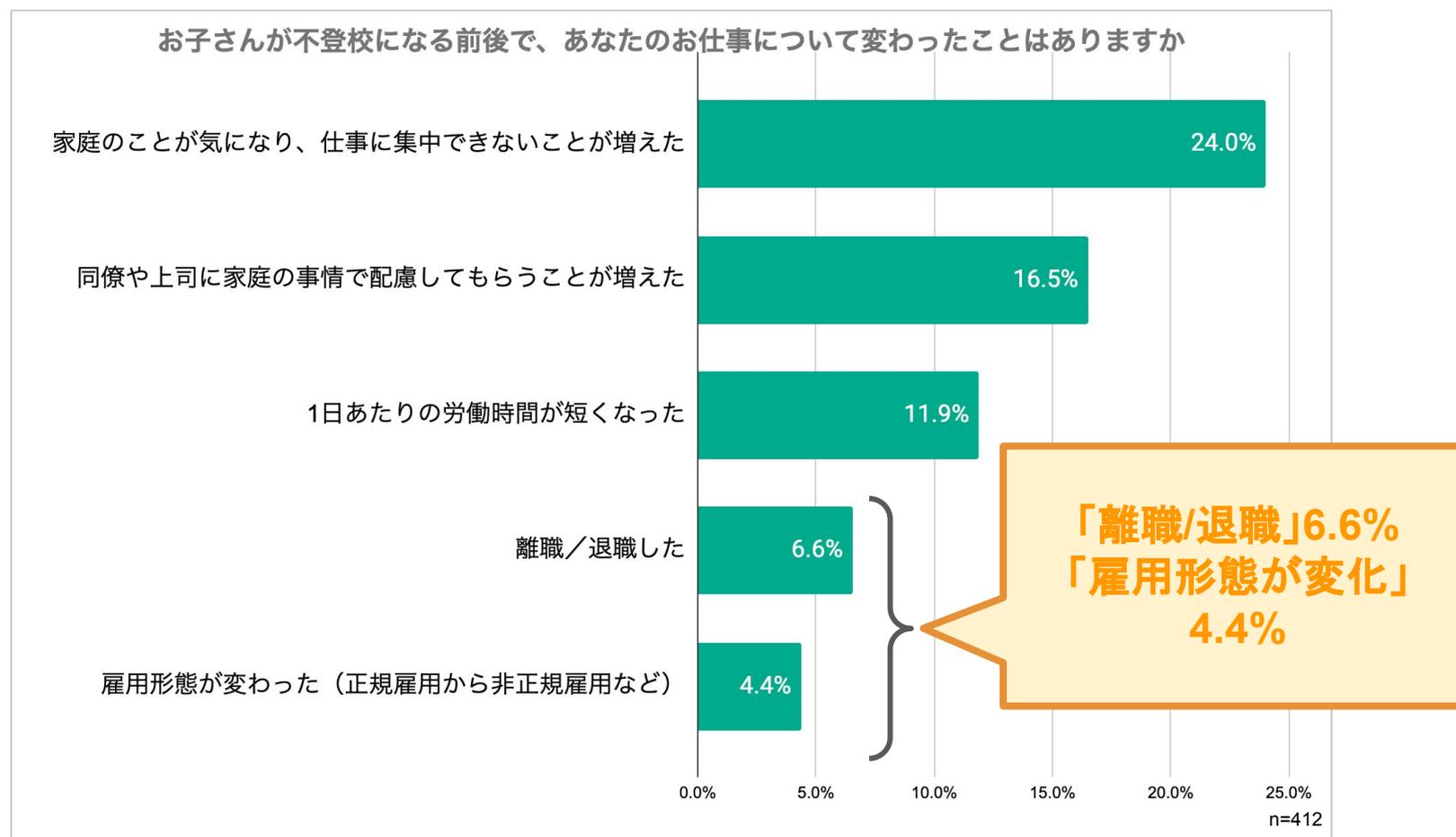
家庭でも何の学習ツールも使っていない子が約2割

前述の「学びの場につながない」に加えて、家の中でも学べていない子の存在が明らかに



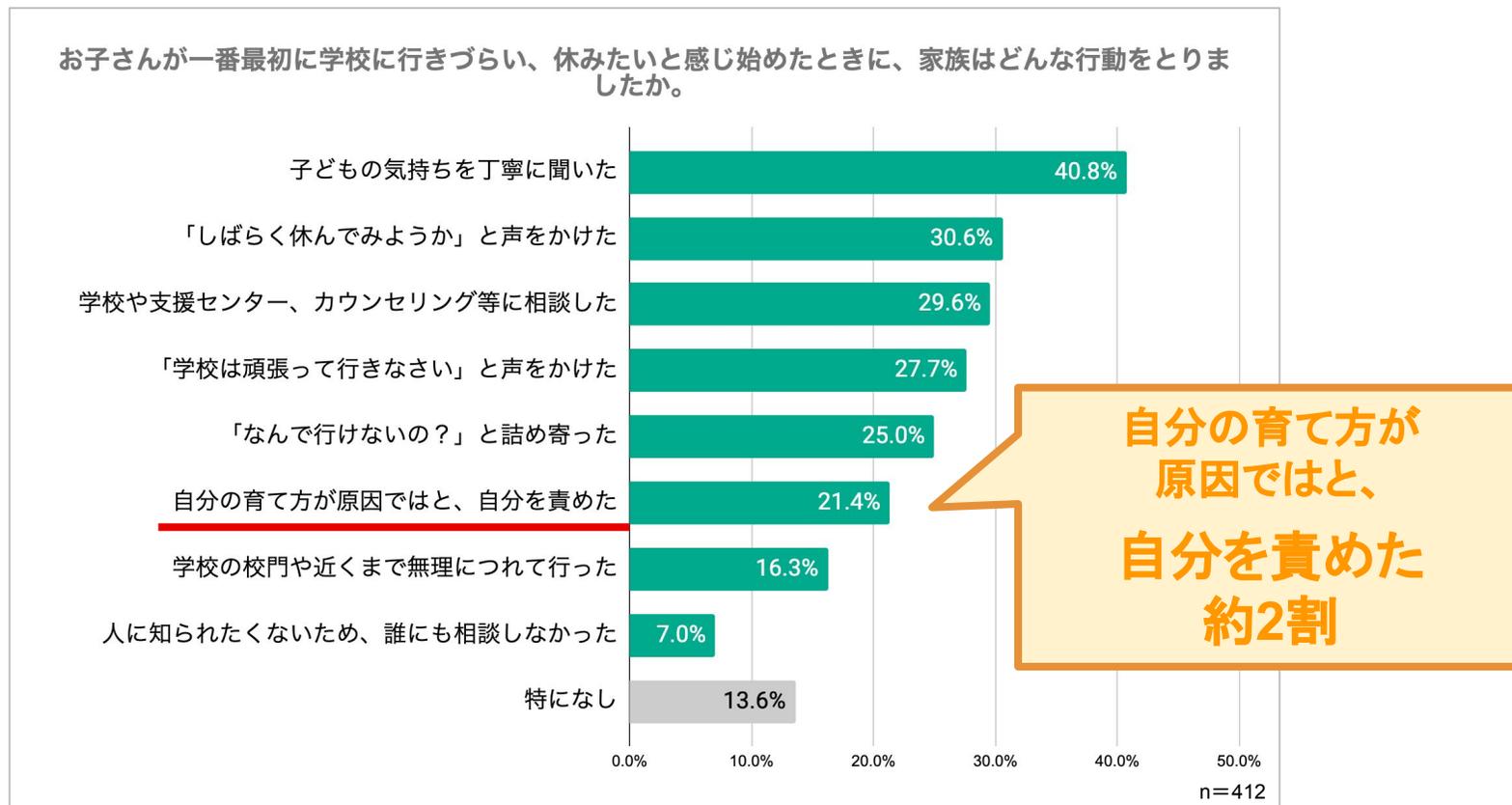
退職/雇用形態変化など、保護者の環境に影響も

仕事を続けられたとしても「集中できない」「仕事場で配慮してもらったことが増えた」人も



不登校児の親の5人に1人は自分を責めた経験

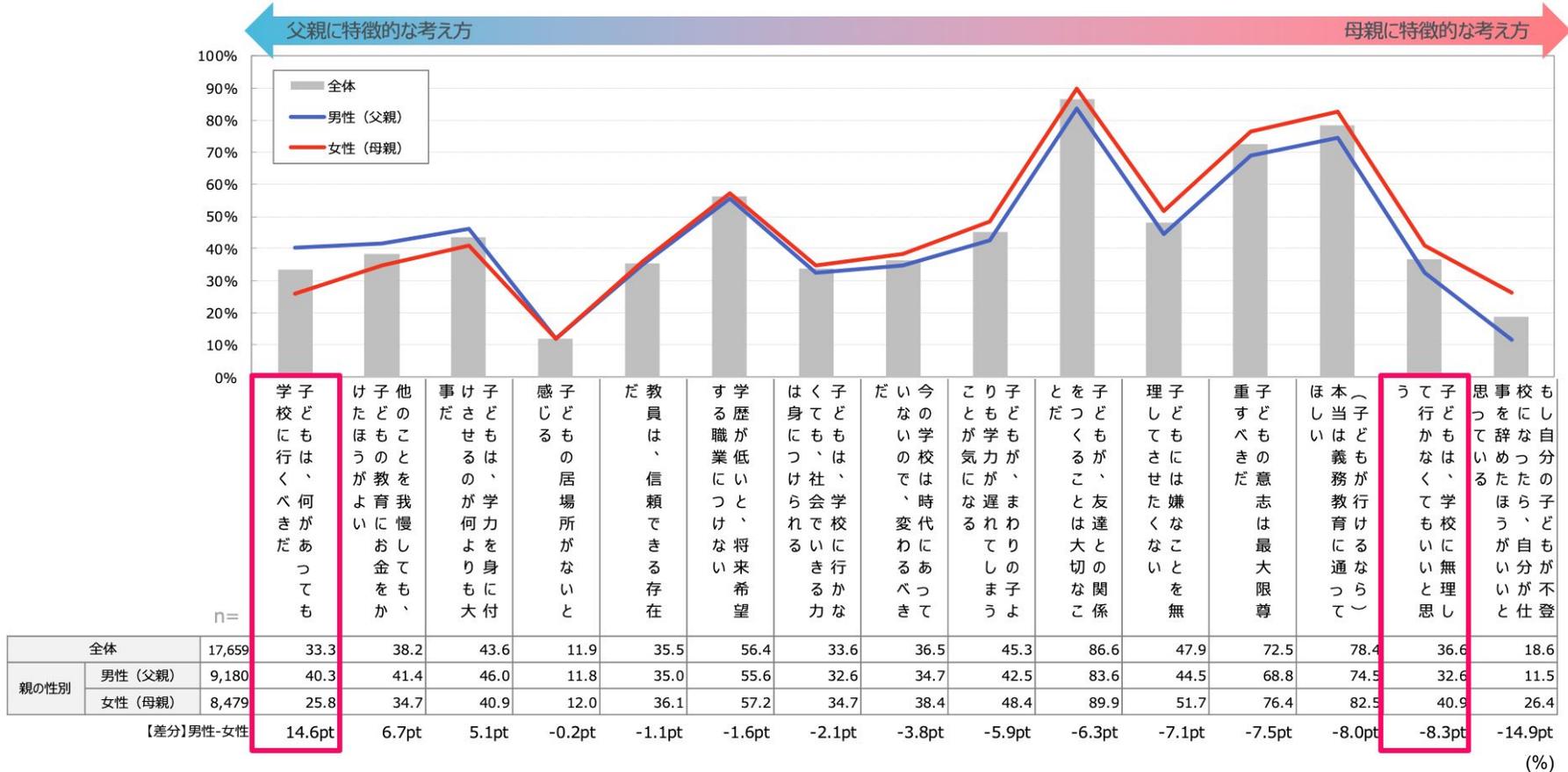
子どもの気持ちを聞いた・休む提案をした...など子どもに寄りそう親が多いが、無理して学校に連れて行こうとしたり、自分を責めたりした親も目立つ



父親と母親で「登校」の考え方に差がある

父親は「何があっても学校行くべき」、母親は「無理して行かなくてもよい」という傾向がやや強い

SQ8.あなたの『子どもに対する考え方』にあてはまるものをお答えください。(単一回答マトリクス) (19歳までの子どもと同居する回答者ベース)
 ※【差分】男性-女性のスコアで降順ソート



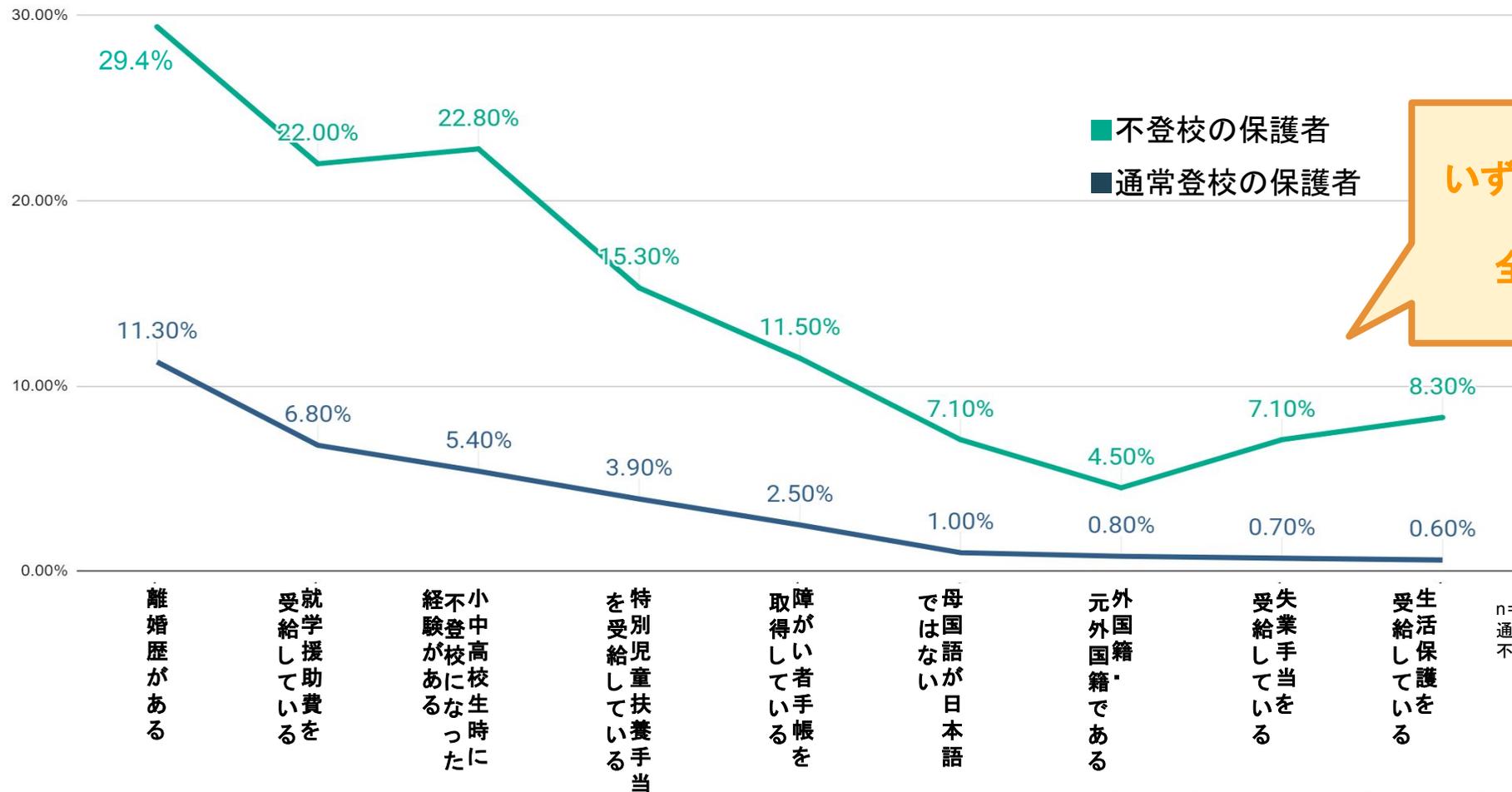
不登校の子を持つ一人親世帯の4割が年収200万円未満

不登校の子を持つ親の世帯年収は「200万円未満」がTOP。うち約95%は母子家庭

No.	世帯年収	未婚	既婚
N		37	375
1	200万円未満	40.5%	3.7%
2	200万円～400万円未満	24.3%	9.6%
3	400万円～600万円未満	18.9%	19.2%
4	600万円～800万円未満	0.0%	21.3%
5	800万円～1000万円未満	5.4%	16.3%
6	1000万円～1200万円未満	0.0%	7.5%
7	1200万円～1500万円未満	2.7%	5.6%
8	1500万円～2000万円未満	0.0%	1.1%
9	2000万円以上	0.0%	1.6%
10	わからない	8.1%	14.1%

不登校の保護者は何らかの困難を抱えている割合が高い

不登校の保護者の半数以上が、収入・障害・言語・自身の不登校体験等の何らかの困難を抱えている



実態調査結果

子どもが不登校になる前後で、離職・退職した人／収入に変動があった人の割合から、これらが社会に与える経済的な影響について算出を行った。

子どもが不登校になる前後での親の就労状況の変化により、社会にもたらされる経済的な影響はおよそ583億円。

▶ 特に子どもが不登校になる前後で離職・退職した人が失う収入の影響が大きい。

※ただし、「子どもが不登校になる前後での変化」について聴取しているため、出産・健康状態の変化など、子どもが不登校になったこと以外に起因する離職や収入の変動も含まれる

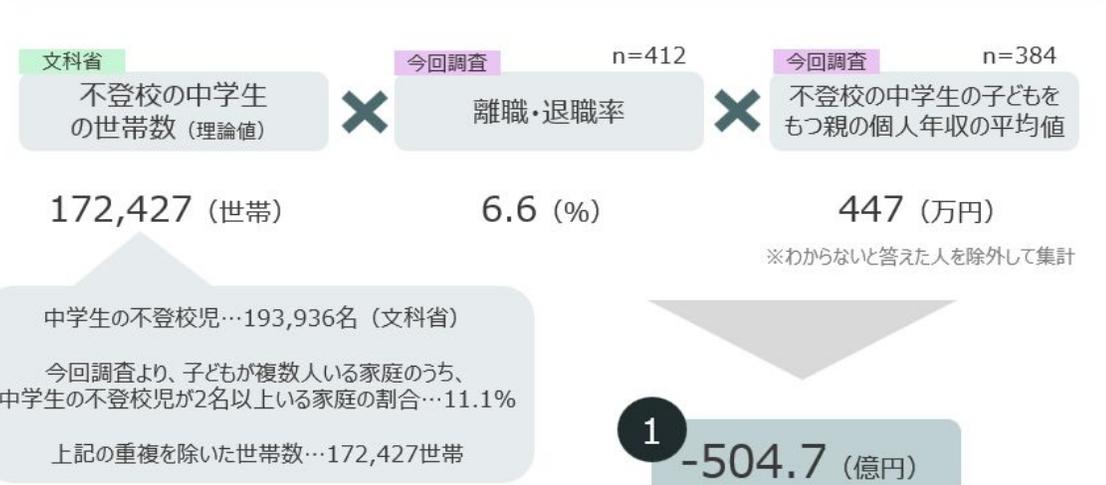
Q9.お子さんが学校を休むようになる前と後とで、収入が変わった方にお聞きます。前と後の個人年収をお答えください。(数値回答)

Q10.お子さんが「1年間に30日以上、もしくは1週間以上連続で、学校を休んだことがある/休んでいる」前後で、あなたのお仕事について変わったことはありますか/ありましたか(複数回答)。

※不登校の中学生の世帯数は、文科省発表の中学生不登校児の数から、今回調査で1世帯内で複数の不登校児がいる(重複している)世帯の割合を除いて算出

※子どもが不登校になる前後で離職・退職した人は、前後で収入が変動した人の集計からは除外して算出
 ※収入が増加・減少した人の割合は、今回調査の保護者の有職者率を用いて算出しているため、平均額について回答した人数とはあわない

1 子どもが不登校になる前後で離職・退職した人の経済的影響



2 子どもが不登校になる前後で収入が変動した人の経済的変動



※ただし算出元のサンプルサイズが小さいため参考値とする

※各種データソースは以下の通り
 文科省 令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査(文部科学省)
 今回調査 今回調査にて聴取

1 + 2 -583.1 (億円)

